

Kwansei Gakuin University Research Center for Christianity and Culture

RCC Newsletter

発行：関西学院大学 キリスト教と文化研究センター

http://www.kwansei.ac.jp/c_rcc/ TEL:0798-54-6019

RCC主催 宗教改革五〇〇年記念行事報告

二〇一七年は、ドイツのカトリック修道士・司祭・神学者であったマルティン・ルターが宗教改革の端緒を開いた一五一七年のいわゆる「九五ヶ条の提題」発表から五〇〇年目の年でした。宗教改革発祥の地であるドイツを始め、各地でさまざまな記念活動が行

われましたが、RCCも七月（一月にかけて講演会・フォーラム・ポスター展等、六件の関連行事を開催しました。本ニューズレターではその概要を写真等を交えてご紹介します。ご協力・ご参加いただいたすべての皆様に心より感謝申し上げます。

講演会

宗教改革でカトリック教会はどう変わったか

講師 上智大学神学部教授 山岡 三治氏

報告者 RCC主任研究員 打樋 啓史



一〇月一九日（木）図書館ホールを会場に、本学での宗教改革五〇〇年記念行事の一環として、RCC主催の講演会が開催されました。上智大学神学部の山岡三治教授を講師に、「宗教

改革でカトリック教会はどう変わったか」というテーマで行われたこの講演会には、学内外から七六名の参加者が集まりました。RCCでは、今回の宗教改革五〇〇年が歴史上初めてプロテスタントとカトリックが共に行う記念であり、「和解」と「交わり」がその中心テーマとなることを重視して、今年度の研究活動を進めてきました。カトリック司祭・神学者である山岡先生をお招きしてのこの講演会は、

まさにその理解を深める貴重な機会として実施されたものです。

山岡先生は冒頭に「交わりの前進」という表現を用いて、今回の講演会の意義を確認されました。宗教改革からの五〇〇年間に、カトリックとプロテスタントのエキクメニカルな交わりは確かに前進してきた。もう後退はあり得ず、これからも前進していくものであり、私たちはそのために努力していく必要がある。そう強調された上で、今回カトリックであるご自身がプロテスタントの大学に講師として招かれたのも、この交わりの実りであるとして感謝を述べられました。

講演内容は、「交わりの前進」として決定的な一歩となった第二バチカン公会議（一九六二年〜一九六五年）に焦点を当てたものでした。一六世紀の宗教改革の後、プロテスタントが勢力を伸ばす中で、カトリックはそれに対し防御的な姿勢を取り、トリエント公会議や第一バチカン公会議にはそれが色濃く反映されました。しかし、世界の危機と変化の中で、その姿勢は徐々に軟化していき、教皇ヨハネ二三世の招集によって開かれた第二バチカン公会議で、カトリック

ク教会は「今日の世界の状況に対応できる教会」へと改革されたのです。それは「これまでのものをすべて捨てて新しくなった」ということではなく、教会が最も本質的なところでは変わらないことなく、様々な面で「今日化」（アジールナメント）されたということでした。

公会議によって生まれた変化として、カトリック教会は以前よりも聖書を重んじ、キリスト論を中心とし、神の民としての全信徒の祭司性を重視し、教会をこの世に開放するようになりました。特に「信徒の共同体としての教会」という認識が、その後、皆で祭壇を囲む円形の教会建築、聖職者中心ではなく信徒の意見を重んじる教会運営などに、具体的に反映されてきたのです。また、公会議によって



カトリック教会はエキュメニズムへと開かれ、プロテスタントや正教との対話、さらに他宗教との対話を進めるようになりました。もちろん変わらなかつた面もありますが、基本的に公會議の精神はその後の教皇たちによっても受け継がれ、この世に開かれた教会の実現はさらに推し進められてきたのです。

最後に講師は、「教会の本質的なものは変わることがないという、それがあつた限り、プロテスタントとカトリックお互いの交流は可能ではないか」とした上で、今日の世界には、両者が「ひとつになるように向かわせる環境」があることを指摘されました。それは、世界のいくつかの地域で教派を問わずキリスト教徒が迫害されていること、カトリックとプロテスタントが従来のように地域ごとに分かれず同じ地域に混ざって暮らすようになったこと、そもそも人々の教会離れが進んでいること、の三点です。このような時代に、両者がお互いのよいところを学び合いながら、距離を取り過ぎず近づいて、この世のために協働していくことができます大切にすることがますます大切になってくると強調されて、講演は締めくくられました。

「ルター」の薔薇」の成立事情

講師 関西大学文学部教授 蛭川 順子氏

報告者 RCCセンター長 水野 隆一



去る二〇一七年一月二七日（月）、蛭川順子氏を講師にお迎えして、RCC主催の標記講演会が行われました（一六時五〇分～一八時二〇分、B号館二〇四号教室）。蛭川氏は、関西大学文学部総合人文学科教授（芸術学美術史専修）で、一五、一六世紀のヨーロッパ北方美術を専門としておられます。本年、『聖心（みこころ）のイコノロジー—宗教改革前後まで』（関西大学出版部）を上梓され、本講演も、このご著書で展開されていた内容を中心に話されました。

「ルターの薔薇」（下の写真参照）のデザインや色の意味については、シュペングレーに宛てた一五三〇年七月八日付の手紙

の中でルター自身が説明しており、その説明に基づいて「ルターの薔薇」が受け入れられています。しかし、この意図は一五二〇年頃から、海賊版を防ぐ意味でルターの著作の表紙に用いられていることが指摘され、この一〇年間の空白（沈黙）に注目が向けられました。

この時代、元々は騎士たちの持ち物に付けられていた、所有者を特定するための紋章が、裕福な市民の間にも広まるようになり、個人の紋章として、いろいろな意匠が作成されたことが紹介されました。そして、ルターの父が使っていた紋章や、ルター家にあつた祭壇のデザインから、この「薔薇」は、聖母マリアに関係するものであつた可能性が指摘されました。

薔薇の中にある「心臓」と「十字架」についても、ルーカス・クラナッハ（父）による《ペスト図（疫病撃退図）》との類似から、聖母の「み心」である可能



性が指摘されました。マリアの賛歌（ルカによる福音書一・四七～五五）のドイツ語訳と注解を書いている（一五二二年）ように、ルターははじめ、マリアに対する尊敬の念を抱いていたと思われまふ。

先のルター自身による説明が書かれた年代についても、検討されました。一旦は緩和されていたヴォルムス勅令（ルターを法律の保護の外に置く）の実行が再び強化されようとしていたときに、「ルターの薔薇」は、ルター個人の紋章から、ルター派の旗印として用いられるようになり、そのため公式の見解、

意匠の確定が必要になつたとするの、蛭川氏の主張です。

蛭川氏は、豊富な図版例や、同時代の文献を用いながら、「ルターの薔薇」の成立事情とその後の受容について自説を展開されました。デザインや図像が既に存在していたものを利用して作られることを考えると、説得力のあるものと感じられました。

関西学院の宗教改革五〇〇年記念行事は、当センターのフォーラムでルター派コラールの成立を取り上げることから始まりましたが、図像の成立と解釈を取り扱う本講演で締めくくられました。宗教改革の音楽や図像を取り上げるこれらの機会は、「キリスト教と文化」をその名に持つ当センターの活動として、ふさわしいものであつたと感じています。



ベルリン大聖堂ファサードの「ルター」の薔薇 講師撮影

■フォーラム

△第一回▽

テーマ・ルター派コラールの始まりと発展 — Kyrie, Gott Vater in Ewigkeit を例に

日時：二〇一七年七月六日（木）
十七時一〇分～一八時四〇分
場所：吉岡記念館三階会議室一
発題：水野 隆一 神学部教授、
RCC センター長

七月六日（木）のフォーラムでは、宗教改革の文化的な影響、とりわけ、礼拝における賛美歌歌唱について取り上げられました。

ルターによる礼拝改革は、ミサを大きく変更せず、ドイツ語で行うことにしたのが特徴で、「ミサ通常文」の部分は、それらに相当する賛美歌（コラール）に置き換えられました。

その中から、「キリエ（あわれ



みの賛歌）」に相当するコラール、「キリエ、永遠の父なる神」

(Kyrie, Gott Vater in Ewigkeit) が、グレゴリオ聖歌《Kyrie, fons bonitatis》をドイツ語化したものとして成立した事情を見た後、ラテン語とドイツ語の詞が比較されました。そして、コラールの受容、とくに、ヨハン・ゼバスチャン・バッハ《クラヴィーア練習曲集第三部》所載曲の解釈を、実際に音楽を聴きながら、検討しました。

これらのことから、通常文のドイツ語化により、結果的に三位一体が強調されることになり、バッハのオルガン曲はそれを音楽で表現していることが確認されました。

△第二回▽

テーマ：テゼ共同体のエキキュメニズムにおける宗教改革の位置
日時：二〇一七年一〇月五日（木）
一七時一〇分～一八時四〇分
場所：吉岡記念館三階会議室一
発題：打樋 啓史 社会学部教授・
宗教主事、RCC 主任研究員

歴史上初めてプロテスタントとカトリックが共同で行なう今回の宗教改革記念は、長い間分裂してきた両者が特に二〇



世紀以降歩み寄ってきたことの裏りでありますが、この一致への歩みに影響を与えてきたのが一九四〇年にキリスト者間の和解を目指して創始されたフランスのテゼ共同体です。このフォーラムでは、テゼの創始者ブラザー・ロジェの思想と生涯に注目して、「交わり」をテーマとする宗教改革五〇〇年記念にとってテゼのもつ意義について論じられました。プロテスタント出身のロジェは、宗教改革の精神を重んじつつも、それがもたらした分裂には与することなく、教会の普遍性を可視化する道を求めて努力を続けました。本フォーラムでは、このロジェの思想と働きについて詳しく紹介され、彼の抱いた一致へのビジョンが特に世界中の若者たちと共有されるようになったことの重要性が強調されました。

△第三回▽

テーマ：ドイツにおいて宗教改革

記念日はどのように祝われたか
日時：二〇一七年十一月六日（木）一七時一〇分～一八時四〇分
場所：吉岡記念館三階会議室一
発題：加納 和寛 神学部准教授、RCC 主任研究員



十一月一六日開催のRCCフォーラム「ドイツにおいて宗教改革記念日はどのように祝われたか」には一九人の参加者がありました。二〇一七年の宗教改革五〇〇年を見据え、ドイツ福音主義教会（EKD）が準備組織を立ち上げたのは二〇〇七年でした。ローマ・カトリック教会やプロテスタント諸教会との対話と協働を中心に準備が進められ、記念諸行事にはカトリックの司教たちをはじめとして、他教会・他宗教の積極的参加が見られました。こうした経緯をさまざまな資料で追いつながら、二〇一七年一〇月三二日、マルティン・ルターによって宗教改革の端緒が開かれた地であ

るヴィッテンベルクでEKD主催により行われた宗教改革記念日礼拝がどのような内容であったのか、またその意味するところをビデオを見ながら共有しました。

■ポスター展

ドイツ総領事館より提供いただいた宗教改革五〇〇年記念ポスター「#Heilstand 我ここに立つーマルティン・ルター、宗教改革とそれがもたらしたもの」(A1サイズ、三〇枚)の展示会を神戸三田キャンパスのアカデミックコモンズインフォメーションホールで一〇月九日（月）～一三日（金）に、西宮上ヶ原キャンパス大学図書館エントランスホールで一〇月一六日（月）～二〇日（金）に開催しました。



■研究プロジェクト報告

■研究プロジェクト

キリスト教主義教育の展開

—キリスト教主義学校における平和教育のあり方をめぐって—

△第二回研究会 発題要旨▽

「平和紛争学の基礎概念と平和教育の関係性」

報告者 奥本 京子 大阪女学院大学教授、RCC 研究員

本報告では、最初に、一つの平和教育のあり方として、東北アジア地域平和構築インスティテュート (NARPI、ナルピ) の実践について紹介した。ナルピとは、毎夏、東北アジアのどこかにて開催される平和構築の研修を提供するネットワークであり、報告者はその運営委員長を務めている。

「修復的正義」「トラウマ・ヒーリング」「平和教育」「平和ワークにおける芸術アプローチ」「平和構築スキルとしてのメディアエーション」「脱軍事化と非暴力抵抗」などのテーマをかかげて、それぞれのクラスは、五日間朝から夕方まで集中的にトレーニングを提供する。

ほとんどの参加者は東北アジ

ア出身者で、このトレーニングを二週間受講するが、その合間にフィールドに出かけ現場から学ぶ機会も用意されている。

二〇一七年夏季は沖縄にて実施。過去の「沖縄戦」や現在の辺野古といった場から学び、沖縄の平和活動に関わる人々と共に未来を考察することができた。そもそも平和ワークとは、平和紛争学を基盤にして、理論研究、調査・活動、普及、そして教育・トレーニングによって構成される。また、直接的暴力の前・最中・後の各局面において、調停・直接行動・和解などを軸としながら、ワークの種類も臨機応変する。

そして、平和創造を考えると、コンフリクト(紛争・対立・葛藤)をどうとらえるかが鍵となる。コンフリクトを平和的手段により扱う場合、平和ワークが可能となる。コンフリクトを武力によって扱うとき、破壊的状況を生み出す。平和紛争学では考えるのである。

■研究プロジェクト

ポップカルチャーとキリスト教

RCC センター長 水野 隆一

い。戦争・武力紛争に連なる要素をどう減じるか。同時に、積極的平和(建設的・創造的・非暴力的に人間・社会・環境の関係を改善する態度・行動)のために、コンフリクトを平和的に扱うことのできる能力を養成することに、社会全体として精を出すことが必須である。そして、それが平和教育・トレーニングの意義であろう。

今年、関西学院全体で宗教改革五〇〇年を記念する行事が行われ、RCCも講演会を二つ主催し、研究員によるフォーラムを三度開催するなど、精力的に活動を行った結果、プロジェクトの研究は少し遅れて出発しましたが、本年より開始されたこのプロジェクトは、七月一日(火)に第一回の研究会を開いて、研究の方向性について話し合いました。また、研究担当者が、それぞれが対象とするトピックをあげて、懇談をしました。

夏休みには、キリスト教に関する映画のリストアップを行いました。研究会活動は、二〇一八年に入って、一月一九日(金)には、東よしみ主任研究員(神学部准

教授)による、黙示文学と映画に関する研究会が行われました。また、二月二二日(水)には、平林孝裕研究員(国際学部教授)によって、『キリスト教的』に映画を観る(鑑賞する、読む、評価する)「可能性についての研究会も行われました。特に、映画とキリスト教をめぐる研究は、成果を積み重ねて、キリスト教界に寄与するものとしたとの願いを持っていますが、これらの研究会は、その端緒となる内容でした。

二年目となる二〇一八年度は、それぞれの課題についての研究を発表する研究を積み重ねて行く予定です。これらの研究会は公開で行われます。多くの方が加わって、議論に加わってくださるようお願いいたします(詳しくは、RCCからの揭示物、ホームページなどをご覧ください)。

編集後記



宗教改革五〇〇年記念の諸行事はいかがでしたでしょうか。講演等の詳細は三月発行予定の『キリスト教と文化研究』に掲載される予定です。こちらも手にとっていただければと願っております。(K)